国立国語研究所学術情報リポジトリ

# ＜講演＞日本語を教えることの楽しさと難しさ



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2017-03-15<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 迫田, 久美子<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.15084/00000917 |

講演 2

# 日本語を教えることの楽しさと難しさ

国立国語研究所日本語教育研究・情報センター センター長　迫田久美子

お早うございます。さきほど鳥飼先生は、英語教育の観点から日本語教育をご覧になって、日本語の大切さをお話しくださいました。私は長い間、日本語を教えておりましたので、学習者がどのように日本語を学ぶのかという日本語教育の観点からお話しさせていただきます。

## はじめに

本日ご来場の皆様の中には、実際に日本語を教えている方もおられますが、多くの方は日本語を教えるってどういうことだろう、どのように教えるのだろう、外国人はきちんと日本語ができるようになるんだろうかなど、いろいろな疑問をお持ちだろうと思います。そこで、本日の私の話は、よく尋ねられる四つの質問と、その答えを通して、日本語を教える楽しさと難しさをご紹介したいと思います。

まず、最初は「日本語教育と国語教育は同じですか?」という質問です。この質問は、最近はあまり聞かれなくなりましたが、十年前、二十年前はよく尋ねられました。

二つ目の質問は、「外国人にとって日本語は難しいですか?」です。「外国人が日本語を習得するのは大変じゃないですか?」ともよく聞かれます。さて、どうでしょうか。

三つ目は、私自身が「日本語を教えて学んだことに、どんなことがあるのでしょうか?」という質問です。「英語ができなくても教えられますか?」「日本語を教えて苦労することは?」など、教えることに関する質問に対して、私自身の経験からお答えします。

最後の質問は、「日本人なら誰でも日本語教師になれるでしょうか?」です。「私でもなれますか。退職したので日本語の教師にでもなろうかと思っているのですが、どうでしょうか」。これも多くの方から尋ねられます。

これら四つの質問とその答えを通して、日本語教育とはどんなものか、教える楽しさと難しさをご紹介したいと思います。

## 日本語学習者について

歴史の文献を解いてみると、日本語を教えることは、十六世紀ころにキリスト教の宣教師に対して日本人が行っていたという事実があります。しかし、実際に日本語教育、日本語教師という職業が一般社会に認められるようになるのは、かなり後のことです。鎖国以前の通訳教育や第二次大戦以前の植民地教育の日本語教育を除くと、語学教育として外国人に日本語を教える仕事が確立するのは、第二次大戦以降、日本が高度経済成長を遂げた後ではないかと思います。

一九八三年に政府が「留学生十万人計画」を発表して、多くの外国の人に日本に来てもらって日本語を普及しようという政策が出されました。その後一九八五年、八六年に日本の各地の大学で、日本語教員養成を専門とする学科が設置されました。そのころから日本語教育、日本語教師という職業が認められるようになったわけです。この「留学生十万人計画」は二〇〇三年に十万人を突破して、二〇〇八年には政府からさらに「留学生三十万人計画」が出されました。そして、二〇一一年の統計では、十三万八千人の留学生が日本で学んでいます（図1）。

留学生の数が一番多い国は、二〇一一年の時点では圧倒的に中国です。そして、韓国、台湾と続きます（図2）。

では、日本国内に在住している外国人も同じような国から来ているのでしょうか。二〇〇五年度の国勢調査では、図2に示しているように、韓国、中国はありますが、そのあとの国が違っています。

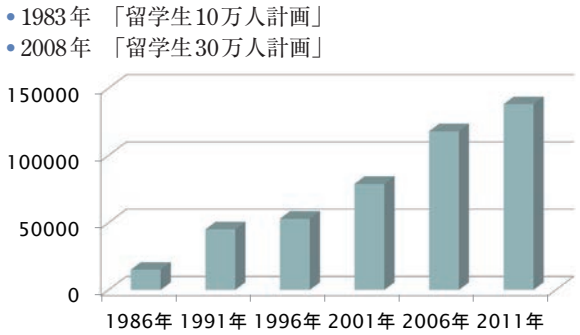
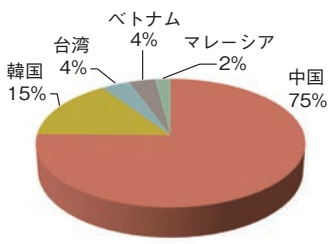
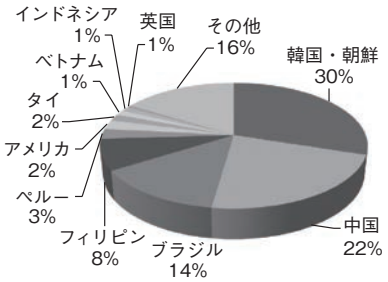



図1　日本における留学生数の推移
（日本学生支援機構　留学生数推移のグラフから抜粋）




上位５位の国別留学生の割合
（日本学生支援機構　2011年度調査）




在住外国人数の国別の割合
（総務省　2005年度国勢調査）

図2　国別の外国人の割合

**さこだ・くみこ**

日本語教師として務めた後、広島大学教授等を経て現職。専門は、日本語教育学、第二言語習得研究、日本語の習得、学習者コーパス、誤用分析、学習ストラテジー、言語処理、日本語教授法、シャドーイング等。
学習者の言語環境と日本語の習得過程を研究テーマとして掲げ、学習者のデータを分析しながら、第二言語習得の普遍的・個別的側面の解明を目指している。本フォーラムのコーディネーターである。
元日本語教育学会副会長、日本語教育学会国際連携委員長等。
主な著書は、『中間言語研究－日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得－』(渓水社、1998年)、『日本語学習者の文法習得』(野田尚史 他と共著、大修館書店、2001年)、『日本語教育に生かす第二言語習得研究』(アルク、2002年)、『講座 日本語教育学 第3巻　言語学習の心理』(編著、スリーエーネットワーク、2006年)、『プロフィシェンシーを育てる～真の日本語能力を求めて～』(鎌田修 他と編著、凡人社、2008年) ほか。

二百七万八千人の外国人が日本に住んでいますが、留学生上位五位の国と在住外国人の上位五位の国は順位が少し違います。在住外国人の第三位はブラジル（一四％）、第四位はフィリピン（八％）、第五位がペルー（三％）で、かれらは留学生ではなく、日本で働きながら生活をしているのです。

## 在住外国人の多様化

では、どんな人たちが、どのような身分で、どういう立場で日本で暮らしているのでしょうか。

留学生、研修生、あるいはJET（The Japan Exchange and Teaching Program）で来日した英語指導助手や英会話学校の先生などはすぐ頭に浮かぶかと思います。それ以外に日本企業で働くビジネスマンや工場などで働く単純労働者です。近年、さまざまな職場で、大きな労働力として活躍している就労者が多くなっています。また、就労者と一緒に来日して、家族で日本に住んでいる場合は、年少者の外国人も多くなっています。さらに昨今では、日本人男性のお嫁さんの候補として外国人の女性が多く来日しているようです。そして最近では、看護師・介護福祉士といった医療や社会福祉の仕事で多くの外国の方が活躍しています（図3）。

- 留学生
- 研修生
- 語学教師
- ビジネスマン
- 就労者
- 年少者
- 外国人妻
- 看護師・介護福祉士

図3　在住外国人の多様化

このように、日本在住の外国人について簡単に紹介しましたが、外国人と一言でいっても、国籍、仕事、立場など多種多様です。

では、このような方々に日本語を教える場合、どのようにしたらよいのでしょうか。

よく、「どうやって日本語を教えたらよいのですか？」と尋ねられますが、では、「すぐに日本語を教えましょう」というわけにはいきません。日本語を教える前にまず大切なことは、ニーズ分析です。ニーズ分析とは、学習者を指導するために必要な情報を収集することです。たとえば、何のために日本語を学ぶのか、これまでにどれだけ日本語を勉強していたか、あるいはまったく勉強していないか、今現在のレベルはどのようなものかなど、いろいろ分析したうえで日本語指導を教えることをスタートさせます。

それと同時に、コースデザインが大切になります。コースデザインとは、これからどう指導していくか、指導全体の計画を立てることです。たとえば、あとどれくらい日本に滞在するのか、学習に割ける時間はどの程度か、教材・指導方法はどういったものがよいか、クラスでレッスンするのがよいか、個別レッスンがよいかなど、トータルで教え方を考えていく必要があります。

## 日本語教育と国語教育は違う？

ところで、日本語教育と国語教育とは同じでしょうか。まず、日本語教育の場合は、学習者は母語をすでに習得している方が対象となります。つまり、学習者には日本語以外の言語が存在するわけです。そして学ぶ内容は、文法や構文の知識、そしてそれらをどのように使うか、という運用力の養成が中心になります。つまり、日本語を外国語として学ぶわけです（図4）。

一方、国語教育の場合は、日本語を母語としてすでに習得している日本人を対象としています。そして、教えることは、文法ではなく、

主に文学作品の読解や鑑賞などが中心になります。このように、日本語教育と国語教育には、大きな違いがあります。一般的に、国語の先生が日本語の先生になったらよいのではないかと思われがちですが、実は日本語教育は英語教育に近いといえると思います。

## 外国人にとって日本語は難しい？

外国人にとって日本語は難しいでしょうか。日本語は世界の他の言語と比べて、特別難しい言語ではありませんが、ある点では、難しい部分があります。それは平仮名、カタカナ、漢字です。日本語は表記形態が複数あるため、ほかの言語より少し難しいかもしれません。たとえば、「いぬ」は平仮名で習い、次に片仮名で習い、最後に漢字がでてきます。一つの言葉に三種類の書き方があります。さらに、一つの漢字にたくさんの読み方があります。

| 日本語教育 | 国語教育 |
|---|---|
| • 学習者は母語をすでに習得している。<br>• 構文や運用力養成が中心。<br>• 日本語を外国語として学ぶ。 | • 学習者は日本語をすでに習得している。<br>• 文学作品等の読解など。 |

**日本語教育は英語教育に近い？**

図4　日本語教育と国語教育は違う？

- 表記形態が複数あること
  いぬ／イヌ／犬
- 読み方が複数あること
  「生」
  1. 生まれる　2. 生きる　3. 生える
  4. 生活　5. 一生　6. 大往生　7. 生卵
  8. 生醤油　9. 芝生　10. 弥生　11. 生粋
  12. 生贄　13. 生憎　14. 生業　15. 早生
  16. 晩生

図5　外国人にとって日本語は難しい？【漢字の存在】

皆さん少し考えてください。「生」この読み方はいくつあるかおわかりになりますか。数えてみてください。

五つ以上あると思う人。

八つ以上あると思う人。

だいぶ少なくなりました。

十以上あると思う人。

正解を申し上げます。ざっとこのようになっています（図5）。すべてお読みになれるでしょうか。生まれる、生きる、生える、生活、一生、大往生、生卵、生醤油、芝生、弥生、生粋、生贄、生憎、生業、早生、晩生の十六です。ほんとうはもう少しあるのですが、残りは是非家に帰って調べていただければと思います。

このように、さまざまな漢字があることが学習困難点なのです。そのため、漢字圏の学習者は逆に、有利にはたらく場合があります。それに対して、非漢字圏、つまり漢字のない、アルファベットの母語を持っている国の人たちには難しい面があると思います。その意味では、非漢字圏の学習者は、漢字圏の学習者より日本語学習は難しい可能性が高くなります（図6）。だからといって、非漢字圏の人たちが日本語ができないわけではありません。むしろ、漢字が面白いと思って頑張って勉強している非漢字圏の学習者もたくさんいます。今日あとからお話

漢字圏学習者
…漢字使用の母語を持つ学習者
例　中国語話者／韓国・朝鮮語話者
非漢字圏学習者
…漢字のない母語を持つ学習者
例　中国語／韓国・朝鮮語以外の話者

**非漢字圏学習者は、漢字圏学習者より日本語学習は難しい（可能性が高い）。**

図6　外国人にとって日本語は難しい？

しになるダニエル・カールさんもそのうちのお一人です。

それ以外にも日本語学習には多くの難しい面があるのではないかと思われますが、日本語は音韻の面、文法の面でほかの言語よりとても難しいというわけではないので、特に問題視することは必要ありませんが、漢字については少し留意が必要かもしれません。

## 外国人にとって日本語は難しい？　日本語の誤用

外国人たちは日本語を学ぶ過程でさまざまな誤用を生み出します。

① 先生、びっくり話す、ください。

② 姉は、二コいます。

③ きのう寿司を食べた。おいしいだった。

④ 先週、映画を見ました。とてもおもしろかったんです。

⑤ 花を育つ、野菜を育つ。

これらは実際の学習者の不自然な日本語ですが、正解はおわかりになるでしょうか。①は「ゆっくり話してください」、②は「姉は二人います」ではなくて、「My elder sister has two children」をそのまま二子と訳したため、姉には子どもが二人いますというのを、「二コ」といったのです。

それから、③の「おいしいだった」は、日本人でもいいそうな誤用ですが、正しくは「おいしかった」です。これは、きれいだった、やすみだったという「だった」から類推し、おいしいに「だった」をつけてしまったと思われます（図7）。

④は、「おもしろかったんです」は、正しくは「おもしろかった」ですが、このように「～んです」というのは強調だと習い「おもしろかったんです」というようにいってしまった可能性があります。

そして⑤は、テレビのあるドキュメンタリーにでてきた外国人が非常にきれいな日本語を話していたのですが、この部分が間違っていました。この自動詞と他動詞も学習困難点の一つです。この「おもしろかったんです」の「んです」や自他動詞は、外国人にとって上級レベルになっても学習が難しいものです。

## 日本語を教えて学んだことは？

私は日本語を教えていていろいろなことを学びました。たとえば、日本語の誤用です（図8）。さきほどご紹介した「高いだった」、「おいしいだった」は、これまで「だった」という言葉をよく聞くので、そこから学習者がルールをつくるわけです。新しい発見をするわけです。これは、学習者は教師が教えたこととは違う彼ら自身のルールをつくるんだという新しい発見ができました。

(1) 先生、びっくり話す、ください。
　　ゆっくり話してください

(2) 姉は二コいます。子供が二人います
　　My elder sister has two children.
　　2　子

(3) おいしいだった。おいしかった
　　きれい　→　きれいだった
　　やすみ　→　やすみだった
　　おいしい　→　おいしいだった

図7　外国人にとって日本語は難しい？

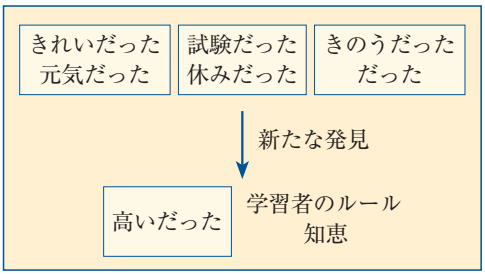



図8　日本語を教えて学んだことは？
【日本語の誤用】

また、学習者の質問も教師を育ててくれます。「先生、『赤い』と『明るい』の語源は同じですか?」という質問がありました。漢字が違うので、違うのではないかと思ったのですが、調べてみたら二つの形容詞は語源が同じでした。どちらも、「アケ(明)、アカラム」という言葉からきていることがわかって、私も大きな発見をさせてもらいました。

それから、ある学生が、「先生、どうして日本人は小さい子どもに向かって『ボク、何歳?』と聞くんですか。『おじちゃん自分の歳わからないの』と思われませんか。なぜ、『君、何歳?』って聞かないんですか?」といわれたんです。これも調べたところ、日本の人は幼い子どもの立場に立って話そうとする共感的同一化という原理が働いている、つまり、幼い子の立場になって、答えやすいように聞くという原理があるそうです。このように、私自身、教えることを通して多くの新たな発見をしました。

## 日本人なら日本語教師になれる?

最後の質問です。日本人は、ほんとうに日本語の教師にふさわしいのでしょうか。私は、そうではないと思います。話せることと、教えることは違います。日本人は無意識に日本語を習得していますので、日本語を体系的に教えることが難しいのです。たとえば、「あげる/もらう/くれる」を外国人にわかりやすく教えられるかというと、そうではありません。「くれる」にあたる言葉が、他の多くの言語にはないのです。「あげる/もらう」は容易にわかります(図9)。しかし、「誕生日に太郎は私に本をくれました」。これは正しいのですが、「誕生日に太郎は花子に本をくれました」は、正しいといえるでしょうか。どうでしょうか。花子が身内の人なら、いいのですが、そうでない場合は不自然です。こういうことを正確に教えるためには、私たち教える側の日本人も日本語を勉強しなければなりません。

「病気で休んだので、友人がご飯を作った」。これは正しいでしょうか。「友人がご飯を作ってくれた」のほうが自然な表現ではないでしょうか。

また、「先生、カバンを持ってさしあげましょうか?」という言い方は、どうでしょうか。できれば、「カバンをお持ちしましょう」のほうがよいのではないでしょうか。このように、私たちは日本語を客観的に学ぶことが必要なのです。

「教える」ためには、日本人も日本語を学習することが必要。

- あげる　○誕生日に太郎は花子に本をあげました。
- もらう　○誕生日に花子は太郎に本をもらいました。
- くれる　○誕生日に太郎は私に本をくれました。
　　?誕生日に太郎は花子に本をくれました。

図9　日本人なら日本語教師になれる?
【日本語教師のための学習】

## 日本語を学ぶこと、教えること

学習者の声を二人ご紹介します(図10)。

ある学習者は、「私は日本の文字は必要ありません。ローマ字で勉強すればいいって思っていました。でも、実際に平仮名を勉強して、日本文化の見方が変わりました」と言っていました。また、「私は尊敬する人は日本にいないから、敬語はいらない」と言っていた学生もいましたが、日本で生活して敬語を学ぶことの必要性がわかったそうです。

最後に、日本語教師からの声をご紹介します。「日本語の指導を通して、日本の言語・文化だけのみならず、政治・経済などを含めて、勉強することが重要だと思います」、「日本語を教えることは学習者の母語を奪うことではありません。学習者の母語・母文化を尊重し、認め合うことの大切さを実感しています」。

日本語を教えることの楽しさは、私たちが日本語を客観的に見ることを学び、日本語や日本文化の新たな発見ができることにあります。それと同時に、日本語を教えることの難しさも認識しなければなりません。日本人だからといって簡単に日本語を教えられるわけではないのです。日本語を教えるためには、日本語を体系的に学び、学習者の立場に立って教えることが必要だと思います。

本日のお話は、これで終わりです。ご清聴、ありがとうございました。

**さまざまな日本語学習者の声**

「初めはローマ字で学習。漢字や平仮名を勉強して、日本文化の見方が広がりました。今は俳句や陶芸に挑戦しています」

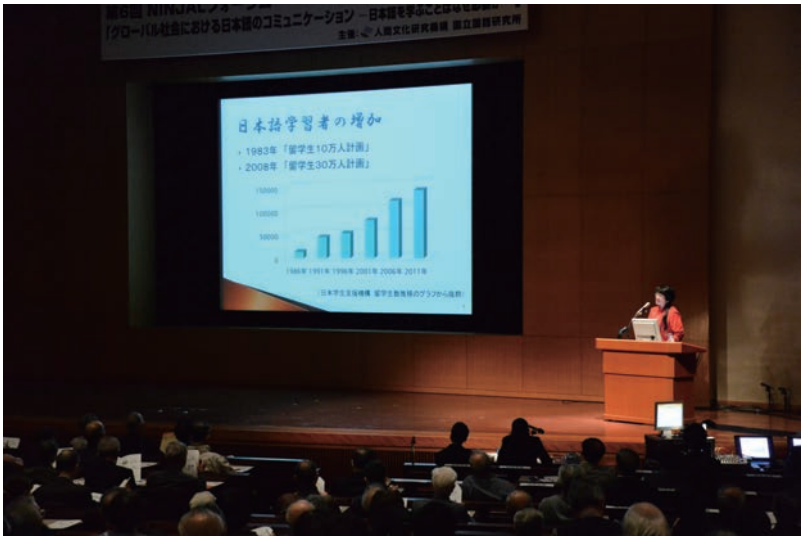
「尊敬する人は日本にいないから、敬語は勉強しなくてもいいと思ったが、生活のいろいろな所で敬語表現が使われていた」

**さまざまな日本語教師の声**

「日本語指導を通して、日本の言語・文化のみならず、政治・経済なども含めて、勉強することの重要性を学んでいる」

「日本語を教えることは学習者の母語を奪うことではない。学習者の母語・母文化を尊重し、認め合うことの大切さを実感」

**図10**　日本語を学ぶこと、教えることから


**参考文献**

・迫田久美子（2002）『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
・総務省統計局・政策統括官・統計研修所（2008）「平成17年度　国勢調査外国人に関する特別集計結果」
・寺村秀夫（1987）『ケーススタディ日本文法』おうふう
・独立行政法人日本学生支援機構（2012）「平成23年度外国人留学生在籍状況調査結果」
・『日本語源広辞典』［増補版］（2012）ミネルヴァ書房